

青谷上寺地遺跡の変遷(二)

弥生時代中期中葉～中期後葉
(約2100～2000年前)

青谷上寺地遺跡で見つかった集落の地形の様子は、中期中葉(約2100年前)では、以前とそれほど大きな変化は見られませんが、中期後葉(約2000年前)になると集落は大きな変貌を遂げます。

遺跡の中でも標高のやや高い範囲は、スギを加工した板

弥生から時を越えて

青谷上寺地遺跡

材などで護岸された溝によって、周囲の湿地や水田といった低地と区切られるようになります。ここで用いられた護岸材は、長さ2メートルを超える大型の板材が多く、建物の一部を再利用したものが多くいよう、大型建物の存在が想像されます。

中期中葉から、土器などの遺物も急増し、生活用具の多様化が見られます。



▲大型の板材を利用した護岸施設

削り抜きの桶や椀など、精巧な木製容器が目につくようになります。古代中国の鉄製品が認められるのもこの段階からであり、木製品の加工器具として用いられたと考えられます。また、骨角製漁撈具が増え、海との関わりがより深くなつたと考えられます。

この時期に特徴的なサメをモチーフにした絵画資料や、木製の琴が見られ、ト骨を用いた占いが始まるなど、この時期の祭祀のあり方を想像することができます。

このように、地域の核となる拠点集落が確立されていく様子が伝わってきます。



今年天文現象ベスト3

毎年、いろいろなショーを繰り広げる夜空の星たち。今年もさまざまな天文現象があります。今回は、今年天文現象で最も注目!!の天文イベントをご紹介します。

★第1位「火星中接近!!」

2005年秋、火星が中接近し(最接近日は10月30日)、10月下旬から12月ごろにかけて見ごろとなります。2003年の火星大接近は「6万年ぶりの接近」と言われて、とても盛り上がりましたね。火星はおよそ2年2カ月おきに接近を繰り返します。しかし、接近のたびに距離が違います。そのため、大接近とか中接近とか小接近とか、その時の接近距離によって区別されるのです。今回の接近は中接近で、接近距離は6,942万キロメートルです。前回の大接近(接近距離5,576万キロメートル)に比べ、望遠鏡で見たときの火星の大きさは一回りくらい小さくなりますが、それでも条件良く火星を見るチャンスです。また、目でも東寄りの空にひときわ明るく赤く輝く火星の姿を見ることができましょう。



★第2位「部分月食」…10月17日(月)

★第3位「アンタレスが月に隠される」…3月31日(木)

☆番外編「探査機ディープ・インパクトが彗星に鉄の玉をぶつける」…7月4日(月)

この他にも、急に天体ショーが起こる場合があります。今年も星空にご注目ください。

佐治天文台長 香西洋樹の「星物語」

vol.4 オリオン

冬の夜空でもっとも親しまれているのが「オリオン座」ですね。夕方の南の空に三つ星を真ん中に、南北にある1等星が目印です。そして、三つ星を左下の方へのばすと、そこに見える明るい星が「シリウス」。オリオンに連れられた「おおいぬ」の姿です。三つ星の南北に見える明るい星は、北が「ベテルギウス」、南は「リゲル」。どちらも1等星ですが、よく見ると色が違います。ベテルギウスはオレンジ色でリゲルは青白の星。色が違うのはなぜでしょう。答えは、星の表面温度の違いです。温度が低いと赤く、高いと青白くなります。そして、赤い星は年老いた星で、青白い星は若くて元気いっぱい星なのです。オリオン座には、このほかにも多くの暗い、かすかな星たちが見えますが、暗い星は遠く、明るい星は近くにあることが知られています。遠いところの明かりは暗く、近い明かりは明るく見えるのと同じ理由です。

StarWorld
見上げてごらん